＜模範解答例＞

問題Ⅰ

Ⅰ．問題のねらい

受験者が自身の専門領域における問い（Research Question）を明確に定義し、それに対する知見や解決策を、学術的に適切な英語を用いて論理的に記述できるかを評価する。単なる知識の羅列ではなく、先行研究との差別化や社会的な意義（Implications）を、博士課程レベルにふさわしい抽象度で展開できているかを確認する。

Ⅱ．模範解答例

回答例①：高齢者の交通事故予防のための人間工学

Title: Ergonomic Approaches to Preventing Traffic Accidents Among the Elderly: Focusing on Pedal Misapplication

My research addresses the critical issue of pedal misapplication—mistaking the accelerator for the brake—which is a leading cause of severe traffic accidents among elderly drivers in aging societies. The primary Research Question (RQ) is: *"To what extent do age-related declines in cognitive-motor inhibition and changes in driving posture contribute to the frequency of pedal errors, and how can ergonomic pedal design mitigate these risks?"*

To investigate this, I conducted a series of driving simulator experiments focusing on the "response inhibition" function. My findings indicate that elderly drivers exhibit significant delays in inhibitory control when faced with sudden environmental changes, such as a pedestrian darting out. Furthermore, ergonomic analysis revealed that the standard pedal layout in many vehicles requires a specific ankle rotation that becomes physiologically taxing for older adults with reduced joint flexibility.

The primary discovery of my research is that pedal misapplication is not merely a "careless mistake" but a systemic failure where the vehicle interface fails to accommodate the physical limitations of the aging body. Specifically, my data showed that a "single-pedal" system, which integrates acceleration and braking into one mechanism, reduced response time and error rates by 30% among drivers aged 75 and older. This suggests that human-centered design, rather than relying solely on driver education, is essential for sustainable mobility in an aging population. These findings provide a theoretical basis for developing next-generation Vehicle-to-Human (V2H) interfaces that account for senescent biomechanics.

回答例②：自殺予防におけるスピリチュアリズム

Title: The Role of Spiritual Well-being in Suicide Prevention: A Qualitative Analysis of Meaning-Making

In the field of clinical psychology and mental health, suicide prevention has traditionally focused on the medical model of treating depression. However, my research explores the often-overlooked dimension of "spiritual pain" or the loss of a sense of meaning in life. The Research Question is: *"How does spiritual well-being, specifically the sense of 'meaning-making' and 'connectedness,' function as a protective factor against suicidal ideation in individuals experiencing chronic existential crises?"*

Using a qualitative approach involving semi-structured interviews with individuals who have recovered from suicidal crises, my study identified that the presence of a "spiritual framework"—not necessarily religious, but a broader sense of purpose or connection to something larger than the self—was a decisive factor in their recovery.

The key findings suggest that traditional risk assessment tools often fail to capture the "existential vacuum" that leads to suicidality. My research highlights that individuals who perceive their suffering as having some form of "transcendent meaning" or who feel a "spiritual connection" to their community or nature exhibit higher resilience. Specifically, I found that "self-transcendence" mediates the relationship between depressive symptoms and suicidal intent. This implies that suicide prevention programs should integrate spiritual care and meaning-centered therapy alongside pharmacological and cognitive-behavioral interventions. By addressing the "why to live" rather than just the "how to reduce symptoms," we can develop more holistic support systems for those in deep psychological distress.

Ⅲ. 採点の基準指標（40 点満点）

評価項目	配点	採点基準（評価のポイント）
1. 問いの明確性 (RQ)	10	研究の目的（何を知ろうとしているか）が具体的かつ学術的な問いとして提示されているか。
2. 論理的構成と知見	10	背景、方法、主な知見、結論が論理的に繋がっているか。知見が具体的に記述されているか。
3. 学術的英語力	10	適切な専門用語（例: *inhibitory control, existential vacuum* 等）が使用され、文法的に正確か。

評価項目	配点	採点基準（評価のポイント）
4. 独創性と意義	10	研究の新規性や、社会・学問分野への貢献（Implications）について明確に述べられているか。

減点対象

- リサーチ・クエスチョンが不明瞭である。
- 内容が一般的な知識に終始し、自身の「知見（Findings)」が示されていない。
- 語数が著しく少ない、または内容が専門レベルに達していない。

問題 II

（模範解答例）

1.

肥満のように，価値が低いとみなされがちな社会的アイデンティティと結びついた属性を変わりうるものだと信じることは，個人がそれらを変えない責任を負うべきだという考えにつながる。

2.

本文では，成長マインドセットが偏見に対して相反する 2 つの経路を通じて影響しうる可能性が示されている。第一の経路は，非難（blame）を媒介するものである。成長マインドセットは，スティグマと結びついた属性が変えられるものであるという信念を強めるため，それらを変えない個人は自己責任であるとみなされやすくなる。その結果，非難や怒りが高まり，結果として偏見の増大につながる。第二の経路は，社会的本質主義（social essentialism）を媒介するものである。成長マインドセットは，人々や集団を不変の本質によって定義する見方を弱め，状況的要因への注目を誘発する。そのため，スティグマをもつ人々を固定的で劣った存在とみなす傾向が低下し，その結果，偏見が減少する。

3.

スティグマを低減するために，属性が不変である（あるいは生得的である）と強調することには問題がある。このような説明は，個人の責任や非難を弱めることで偏見を低減する可能性がある一方で，当該属性をもつ人々が自分たちとは本質的に異なる存在であるという認識を強化してしまうおそれがある。その結果，属性が不変で内在的なものであるとみなされ，そのことがかえって偏見やスティグマを維持・増幅してしまう可能性を有する。このように，固定的な説明は利点と問題点の両方をもつ点は，mixed-blessings model の観点を支持するものでもある。

4.

social essentialism，すなわち社会的本質主義とは，特定の集団の人々が，その成員を定義するような共通の内在的で不変の本質をもっていると考える見方である。この考え方では，スティグマと結びついた属性が，その人の安定した本質的特徴であると捉えられやすく，偏見を助長する要因となる。

問題 II に関する「問題のねらい」「模範解答例」「採点の基準指標」

II. 問題の全体的なねらい

マインドセット（属性の可変性に関する信念）が、対人認知や偏見の形成・維持にいかに複雑に作用するかを論じた最新の心理学論文を題材としている。単なる情報の抜き出しではなく、「非難（責任帰属）」と「本質主義」という２つの異なる心理的メカニズムが、偏見に対して正負の両方向に作用する構造を正確に理解し、論理的に説明する能力を評価する。

＜問題のねらい＞と＜採点の基準＞

１.【下線部和訳】

問題のねらい

複雑な後置修飾（Attributes associated with...）を含む構文を正確に解析し、心理学の専門用語（devalued social identities など）を文脈に即した適切な日本語で再現できるかを確認する。

採点の基準指標

必須要素:

1. 「価値が低いとみなされる社会的アイデンティティ」あるいはそれに類する訳（devalued social identities)。
2. 「責任を負うべき／説明責任がある」(be held accountable）というニュアンス。

加点/減点ポイント:

"Believing that..." の主語節を正しく訳せているか。

心理学用語として「アカウント（accountable)」を「責任」「説明責任」と訳せているか。

２.【二つの経路の説明】

問題のねらい

成長マインドセットがもたらす「偏見の増大」と「偏見の減少」という、一見矛盾する「諸刃の剣」的なプロセスを、媒介変数（blame / social essentialism）を用いて論理的に整理・説明できるかを問う。

採点の基準指標

経路１（非難）:

媒介変数：非難（blame）または責任帰属。

偏見との関係：成長マインドセット → 変化可能 → 変えないのは自己責任 → 非難増大 → 偏見増大。

経路 2（社会的本質主義）：

媒介変数：社会的本質主義（social essentialism）。

偏見との関係：成長マインドセット → 状況要因に注目 → 固定的な本質視の低下 → 偏見減少。

評価のポイント: 二つの経路が「相反する（正と負の）」影響であることを明記しているか。

3．【不変性の強調に伴う問題点】

問題のねらい

「生得的なものだから仕方ない」という従来型の偏見低減策がはらむ「副作用」について、本文で挙げられた「mixed-blessings model」等の概念を援用しながら批判的に考察できるかを問う。

採点の基準指標

必須要素:

1. 責任は免除されるが、「本質的な違い」が強調されてしまう点。
2. それが偏見を維持・増幅しうるという懸念。

加点ポイント:

「mixed-blessings model」への言及。

属性が「安定的・内在的」なものとして固定化されるリスクへの指摘。

4．【概念説明：社会的本質主義】

問題のねらい

心理学における重要概念である「本質主義」を、本文の具体例（特性帰属と状況帰属の対比など）に基づき、自分の言葉で定義・説明できるかを確認する。

採点の基準指標

定義の正確性:

「集団の成員を定義する、共通の内在的・不変の本質がある」という考え。

文脈的理解:

スティグマをその人の「安定した本質的特徴」と見なすことで偏見を助長する、という側面。

加点ポイント:

固定マインドセットとの関連や、個人の内面的特性への過度な依存について触れている。

採点用参考：概念相関関係図

回答の論理的整合性を確認する際、以下の構造が把握されているかを指標とする。

○ 成長マインドセット（可変）　変化可能→ 非難↑　偏見↑

状況重視→　本質主義 ↓　偏見 ↓

○固定マインドセット（不変）

変化不能→　非難↓　偏見↓

特性重視→　本質主義↑　偏見↑